
日本はきもの博物館収蔵資料紹介

～ 18世紀前半の靴～

日本はきもの博物館学芸員(非常勤) 市田京子

はじめに

ここでは、日本はきもの博物館（広島県福山市）に所蔵されている欧米のシュー・ファッションの歴史を伝える資料を紹介させていただいており、今回はその資料441点から、18世紀前半の靴を取り上げる。

18世紀はヒールが完成したといえる時代で、美しい曲線を描くヒールがついた靴が特徴となっている。このヒールは、フランスの絶対王朝爛熟期という時代を象徴して、その王ルイ15世にちなんで「ルイヒール」と呼ばれている。ルイヒールは大きく4つのタイプで変遷しており（注1）、今回は初めの2つのタイプを中心に紹介する。

なお、掲載する写真は記載のないものが全てが日本はきもの博物館所蔵である。

1. 18世紀初頭のミュール

ミュールは呼称としては日本でも定着しているが、17世紀になって装飾性を増してプライベートな空間で用いられた。爪先部のみ覆う形は、16世紀に流行したチョピン

の系譜ともいえ、絵画に描かれた姿も多く見られる。

写真1の左は17世紀末から18世紀初めのものである。深く覆われる爪先部は先端が小さく丸みをもっている。表はワインレッドのベルベットで、白糸に巻いた金糸で立体的な刺繍が施され、裏打ちは白革（小山羊か）で、履き口には幅の広い金糸ブレードがつけられている。内底もベルベットで、足裏にあわせるように浅くくぼんでいる。黒革巻きのヒールに17世紀の形を残した、華やかで優雅なミュールである。

このミュールには特別な思い出がある。収集時のデータに「イギリスのチャールズ1世妃ヘンリエッタ・マリア(1609-69)のものと同じスタイル」とあり、側面形の写真では全く同じに見え、1660～65年頃とある。何故こちらは50年近くも後のものになるのか、この時点では納得できなかった。

その後、イギリスに行く機会を得て、その王妃のミュールがあるヴィクトリア&アルバート・ミュージアムを訪ねることが出



写真1



写真2

来た。全体を見ると一目瞭然だった。爪先が違っていった。先端は小さいながら、17世紀特有の四角でドーム形に立ち上がっていた。実物資料に触れることの大切さを実感させられたことだった。

全長23.7×幅7.7×全高8.1cm、ヒール高6.5cm。

写真1の右は男性用のミュールである。やはり爪先部の覆いは深く、表はピンクのシルク張りだったが、退色と劣化が著しい。裏打ちと内底は白い革で、履き口には銀糸のブレードが付けられている。爪先先端は、硬い革で補強されて四角を呈しドーム型に立ち上がる。17世紀の特徴であった形式が、長さや幅の広さを変えて1700～20年代の男性用の典型となっている。内底は丸くくぼみ、ストレートなヒールには黒革が巻いてある。

内底に「George 2's Slippers」と手書きされていて、イギリス王ジョージ2世(1683-1760)着用とも考えられる。

全長26.4×幅9.2×全高9.4cm、ヒール高4.4cm。

写真2は、1720～30年頃のミュールで、銀糸を織り込んだシルクを張り、幅広のシルクリボンのフリル飾りがつく。白革(羊か)を張った内底は、踵部から直線ともいえる角度で、接地する爪先に下りていて、接地面での内底の傷みは著しい。華奢な優雅さを伝えるミュールであるが、歩く困難さを伝えるようである。

全長16.1×幅7.2×全高10.9cm、ヒール高10.9cm。踵は出たであろうが、足の入った長さは約17.5cmほどである。

2. 18世紀前半の靴の特徴

高く曲線的なヒールが付くようになるこ

の時期の靴は、爪先が細く尖り、反りがあがっている。爪先からヒールまで続く外底は厚みのある硬い革で、左右は同形に作られている。底は幅の中央が膨らむ形に湾曲させてあり、そのため内部には足が収まるくぼみがつくようになっている(写真3)。靴底は回りに切り目を入れて縫い合わされ、甲材と底革は細い白革(rand)をはさんで縫い合わされる。中敷きのようなクッション性のあるものはなく、底革の上に薄い革か一枚の布が張られている。

甲部も表材と裏打ちの間に芯材はなく、踵を支える芯も入らない。甲は深く、履き口前部中央を舌革状にして、その上を左右から幅広のストラップで覆い、ストラップを大型のバックルで留める。デザインであるとともに足を安定させる機能ももつようである。バックルは金属の台座に、新たに登場して大流行した人造宝石を並べたもので、17世紀のロゼッタなどのリボン飾りから大きく変化している。

ルイ14世が「鬘とヒールの靴がなかったらただのおじさん」と揶揄されたように、17世紀までは靴は男女とも同様のデザインだったようだが、18世紀になって高いヒール



写真3 靴底/上:写真5、下:写真7

ルの靴は女性用になっていく。

3. 細く高いヒールから太いヒールへ

写真2のミュールのヒールは大きな曲線を描く高いもので、初期のルイヒールの典型である。同じヒールの写真4はスイスのバリー・シュー・ミュージアムのもの(注2)で、美しさが際立つヒールは革で巻かれ、手前の靴は、17世紀から高価とされた赤い革(モロッコ産)が用いられている。残念ながら、はきもの博物館には典型的な靴はないが、写真5はこのタイプのヒールのつくものである。甲の素材は植物模様を織り出したシルク・ブロケード(錦織)で、素朴な金属だけのバックルがついている。Swann氏(注3)によると、このブロケードはフランスのリヨンのもので、靴もフランスのものではないかという。革を巻いたヒールは、やや低いが、前後に大きくカーブして中心が土踏まず部を支える形になっている。ルイヒールの機能性はここにあるといえる。

この靴の甲部側面中程とストラップには無地のシルクがあてられ、縫い目も粗くなっている。これもSwann氏によるのであるが、この靴はいわゆる「お下がり」で、その時サイズを大きくするためになされた「継ぎあて」だという。単なる補修ではないとすると、粗末なバックルや傷みの激しいヒールの巻き革に納得がいく。

1730～40年代。全長22.0×幅8.1×全高14.4cm。ヒール高8.9cm。

ほぼ同時期から長く続いたのは、もう少し歩き易そうな太さのあるヒールである。

写真6はアイボリー地に花柄のシルク・ブロケードで緑のシルクテープの縁取りがあり、ヒールも同じ生地で巻かれている。バックルが残らないのは、一足ごとに用意



写真4



写真5



写真6



写真7 右下は内底のラベル





写真8

したのではなかったためであろう。この靴は、由来書によると、1722年にスコットランドからイングランドに来たIsabella Allen夫人がジョージ1世（在位1714～27）の宮廷で用いたという。

全長25.2×幅7.9×全高13.6cm。ヒール高6.7cm。

写真7はシルク・ダマスク（地模様のある縹子織）に幅広の銀糸ブレード飾りの靴である。ダマスクは現在まぼろしのような織物らしいが、光沢のある地模様が美しい上品な素材で、この時期に限って、靴には多く使用されている。

この靴の内底には紙製のラベルがある。〈Made by WILLIAM HOSE At the Boot in Lombard Street London〉。博物館所蔵資料の中ではラベルのつく最も早いものである。WILLIAM HOSEの店は1742年から90年までであったという（Swann氏）。

1730～40年頃。全長23.8×幅7.5×全高11.6cm。ヒール高6.7cm。

写真8もシルク・ダマスク地で、アイボリーの光沢のある地模様が美しく残っている。甲の裏打ちは前部がシルク、甲部が革で、内底には革が張られている。爪先の反りが緩く、ヒールがやや細くなっている。やはりバックルは付属しておらず、写真の

バックルは、カーブが合うこの時期のオリジナルを使用している。

1730年頃。全長21.9×幅7.0×全高11.7cm。ヒール高6.9cm。

おわりに

ヒールの出現には幾つかの説があるが、この時期のヒールを見ると、豪華なドレスとのバランスを取る手段としての高さではあったと思われる。大きく張ったスカートからちらちらのぞく尖った小さな爪先ときれいなカーブのヒールのためだけに、美しく高価なシルク、サテン・ダマスク・ブロードが用いられたのである。

靴の機能性は未熟なままヒールを高くするために、前後を大きく伸ばして体重を支えるルイヒールが登場し、それを履き易くしたのが、太さのあるヒールだったといえる。この時期の靴は全て手縫いであるが、革を巻いた細いヒールより、甲と同材のシルクを巻いた太いヒールのほうが細い糸で細い縫い目となっている。出現順と技術の進捗をあらわすものだろう。

次回は18世紀後半の靴を紹介する。

注

- 1) 「かわとはきもの」No.154, 10～11ページ参照。
- 2) バリー・シュー・ミュージアムのカタログより。
- 3) June Swann氏はイギリスのノーザンプトン・ミュージアムで長年靴の研究に携わった方で、1994年日本はきもの博物館に来館。

18世紀前半の靴 —日本はきもの博物館所蔵—



1720～30年代の靴。
ワインレッドのシルクダマスクに
金糸ブレードの飾り。

1720～30年代の靴。
アイボリーの子山羊革にカー
ネーションなどの花柄をペイン
トしてある。
シルクリボンのロゼッタは17世
紀のスタイルを模したもの。



1750年頃の靴
アイボリーのシルクサテン地に
シルク糸や金糸の刺繍。
ヒールを巻いた
シルク・ブ
ロケードはドレス
の生地に合わせて
したもの。
(リボンは補修)